
光と闇のはざまに

織倉正美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇のはざまに

【Nコード】

N8505Z

【作者名】

織倉正美

【あらすじ】

ファンタジーのボーイ・ミーツ・ガールものです。

神々の争いに巻き込まれる主人公とヒロインの運命を描いています。

序

「ネルセ・レアディ……おまえからからわざわざ俺を誘ってくれるなんて珍しいな。どういう心境の変化かな？」

そう言つて悪戯っぽく笑う黒髪黒瞳の青年を見返して、ネルセ・レアディは深々とため息をついた。

人選、いや神選を誤ったかもしれない……。

しかし協力してくれそうな神のうち、彼以上に力を持つ者はいないのだ。

「イフェ・ラディアス、あなたに頼みたいことがあるんだ。実は……」

「リ・スファノアの馬鹿野郎が、気違いじみたことを企ててるから、それを隠密裏に処理する手伝いをしてほしいっていうんだろ？」

みなまで言わせずネルセ・レアディの言葉を継いでみせて、その驚きの表情を楽しみながら、黒髪黒瞳の青年……イフェ・ラディアスは静かに笑った。

「あなたは……知ってたのか……」

「俺は『耳がいい』からな……。たいていのことは知ってる。なにか、知りたいことがあったら聞きにくるといい。おまえにならなくても教えてやるよ」

「それなら話は早い……。彼の企ては危険だ。私に力を貸してほしい」

「やだね」

イフェ・ラディアスは、小馬鹿にしたように言つと意地悪く笑った。

「そんな面倒なことを何で俺が手伝わなければならないんだ。そんなことはリ・セステイスにでも頼めばいい。あいつは真面目だし、おまえに惚れぬいてるから喜んで力を貸してくれるだろうよ」

できることならそうしている……。それができないから、こうし

て、こんなやつに頭を下げているのだ。

少年とも少女ともとれる、あるいはその両方でもない繊細な美貌を怒りにふるえさせながらも、ネルセ・レアディはつとめて平静に答える。

「セステイスに頼めばことは隠密裏ではすまなくなる。下手をすればすべての界を巻き込んだ戦乱になりかねない」

「確かに。あいつは真面目だけど融通なんてものは全く利かない石頭だからな。少なくともスファノアの阿呆に決闘を挑むくらいのことはやってのけるだろうな」

神同士の決闘！？ それだけでも界のひとつやふたつに、致命的な天変地異を起こしかねない。

「解っているのならふざけないでくれ！ こんなことを頼めるのはあなたしかないんだ。だから……」

「なかなか頼み方がうまいじゃないか。確かに俺が協力すれば、あいつの企てを隠密裏に葬り去ることも可能だろうな。まあ、おまえがそこまで言うなら引き受けてやらんこともないが……」

ネルセ・レアディは相手の言わんとすることを察し仏頂面で言葉を継ぐ。

「条件次第ってワケか」

「そういうことだ……条件といってもたいしたことじゃない。おまえ、もう何か策は立ててあるのか？」

イフェ・ラディアスの問いに、ネルセ・レアディはぐつと言葉を詰まらせる。

何も考え付かなかったからこそ助力を求めに来たのだ、なんて言えない。

「そんなことだろうと思ったよ。まあそれならちょうどいい。俺の条件はただひとつ、この件の処理に関して俺に立てた策に従うこと、それだけだ」

イフェ・ラディアスの意外な言葉に、ネルセ・レアディは思わず怒りを忘れて問いかける。

「何か、いい策があるのか！」

「ああ……とっておきのがな。おまえはただ、自らの力のかけらをふたつ用意すればいい。核に使うだけだから、それほど大きなものでなくてもかまわん。それさえ用意してくれれば、後はこっちですべてけりをつけてやる。どうだ？ そちらにとってもかなりいい条件じゃないか？ 我ながら気前のいいことだと思うがな……」

確かにいい条件だ。かけらを渡すのは危険だが、小さい物がふたつ程度なら、悪用するにしても、たいしたことはできないはずだ。

だが、あまりに話がうますぎる。何か裏があるに違いない。

「私のかけらをふたつ……それを核にしたい何に使うんだ？」
「媒介に使うのさ。それを利用して奴の崩そうとしている均衡を支えようってわけだ。残念ながら属性の違う俺の力を奴に気付かれずに送るには、それが必要なんでな」

「なるほど。私の力をつかって自分の勢力範囲を広げようって魂胆だな。そのついでに均衡も支えてくれるってわけだ」

「御名答……まどろっこしいけど、それが一番いい方法だろう。違うか？」

つまりは以前からネルセ・レアデイが助力を申し出るのを予想していて、それを利用することを考えていたに違いない。

最初から引き受けるつもりでいながら、こちらをからかっていたのだ。

しかし、そういうことなら逆に信用してよさそうだ。イフェ・ラディアスは食えないヤツだが、少なくとも自らの利益がからむ時は、約束を破ったことはない。

「わかった。かけらは明日までに用意する。目的を果たせるのなら好きなようにつかってくれ」

「オーケー。これで契約成立だな。まあ適当に期待して待つてくれ」

そう言ったイフェ・ラディアスの瞳が、一瞬、悪戯っぽく光ったことに、ネルセ・レアデイは気付かなかった。

零章

下弦の遅い月が、地平線から顔をのぞかせた。

月光は淡い。

しかしその淡い月光は、ふたりの姿を追跡者へと示した。

追跡者の長は狡猾な笑いを浮かべると、部下に合図を送り、巧妙に退路をふさがせる。

そして自分は、ゆつくりとふたりの方へと向かった。

「姫君……ここまでですな。あなたは裁きを受けねばなりません。その邪悪な闇の使徒とともに、偉大なる光神へ、その汚れた魂を捧げなさい。さすれば、あなたの罪は浄化され、再び光のもとへと還ることができます。姫君……神は慈悲深い。あなたのように汚れきった存在でさえ救ってくださるのです。さあ、その邪悪な闇の使徒を神へと差し出しなさい」

「この子は……ルークは私の息子です。そしてあの方の……私を救ってくれたあのひとの息子です。この子は渡しません。たとえ魂が滅びても、私はこの子を護ります」

姫と呼ばれた、まだ年若い美しい女性が、決然と言い放ち、我が身を盾にして息子をかばう。

「どうやら完全に魔に魅入られてしまっているようですね。自ら神のもとへ赴く気がないのなら、私が送ってさしあげましょう。さあ姫君。浄化の光に導かれ、神のもとへと旅立ちなさい！」

追跡者の長はそう言って、手に持っていた宝玉を掲げた。

その一瞬後、宝玉は目が眩むほどの閃光と化し、光の奔流となって母子を襲う。

「くっ……」

浄化の光などではない。破壊と殺戮の光がふたりを包みこもうとした瞬間、辛うじて間に合った防御結界が、何とか光を押しとどめる。

「ほほう……さすがはかつて、巫女王の後継最有力候補だっただけのことがありますね。しかし、これではどうですか？ ……そう
れ」

そう言つと男は、輝く宝玉を虚空へ放り投げた。
宙に浮かんだ宝玉から、さらに光がほとばしり、ふたりに殺到す
る。

だめ……このままでは……。

結界は、もういくらもちそうにない。覚悟を決めるときが来た
ようだ。

何としても……この子だけは、助ける！

彼女は心を決めると結界を解除し、自ら光の奔流へと身を投げた。
全身を光に焦かれながら、その光の魔力を取り込み、息子へと集
中させる。

「母上！」

息子の悲痛な叫びを耳にしながら、彼女は転移の呪法を完結させ
た。

生きて……ルアーク。

「ははうえー！」

ルアークの絶叫が響き、彼がいずこへかと消えた瞬間、光がすべ
てを舐め尽くす。

そして……虚無があたりを支配した。

一章

何かに操られながら、フィルデラは進んだ。
封邪の間。

その凝縮された力はどのような存在でも捕らえ、自由を奪うことが出来る。

フィルデラは無意識のうちに扉を開くと、その恐るべき牢獄に捕らえられた哀れな生物と対した。

「私を呼んだのはあなたなの？」

本来はこの程度の力に縛られる彼女ではない。

操られるように行動しながらも、フィルデラは自らの意識を失ってはいなかった。

その導きの力が持っていた悲痛な願いを察して、自ら操られたのだ。

導きの力の主……暗黒竜もそれを理解したのだろう。フィルデラの質問に肯定とともに感謝の意志を含ませて答えた。

「何がお望みなのか？ ……逃がしてあげることができないけれど、それ以外で私にできることなら、かなえてあげられるかもしれないわ」

フィルデラは慎重に言葉を紡いだ。

この生物は邪悪なものだ。いや、そうであるはずだ。

しかし、この生物と実際に意識をふれあわせてみて、この生物が自分が今まで思っていたような邪悪な存在では決してないと、フィルデラは感じた。

だが、気を許すべきではない。

もしかしたら、この生物が真に邪悪な存在であるがために、フィルデラの感覚がごまかされているのかもしれないのだ。

そのフィルデラの疑心が伝わったのか、その生物は苦笑したような心理イメージを発した。

逃げるつもりはない……。逃げようとしてもそれだけの力が自分にはもう無い。

その心理イメージから、彼が いやこの竜は女性だ 彼女が既に、肉体も精神も、ぼろぼろに傷つけられていることを理解して、フィルデラは怒りを感じた。

彼女がまだ生きていられるのは、この封邪の間の持つ、強力な呪縛のためでしかない。

この残酷な呪縛は、捕らえた生物にたいして、死による開放さえ許さないのだ。

この邪悪な生き物は浄化され、汚れなき魂へと昇華させられるために捕らえられたのではなかったのか？

少なくとも、このような残酷な責めを受けるためでは無かったはずだ。

たとえ彼女が真に邪悪な存在であつたとしても、これは許されることではない。

「だれが……だれが、あなたにこんなことをしたの？」

フィルデラは知らなかった。この質問が、自らの運命を変えたことを。

黒竜は思念を返した。

おおきな、おおきな存在。光に満ちた存在。

それが私を傷つけ、魂を食らうのだと。

光り輝く、巨大なイメージ。

その存在のことをフィルデラは知っていた。

それは、神。

少なくともほんの少し以前までは、フィルデラにとってそれは偉大なる正しき神だった。

そう……ついさっきまでは。

真実が静かにフィルデラの意識の中に染み込んでいく。

彼は確かに神以外の何者でもない。

しかし、彼は本当に正しいのだろうか？

彼の無謬を信じた自分は本当に正しかったのだろうか？

光に満ちていること＝正義。

暗黒＝邪悪。

この等式は本当に成り立つのだろうか？

これまでに幾度となく感じていた疑問。

その解答がここにあった。

フィルデラの中で、何かが音を立てて崩れていく。

信じたかった……。信じていたかった。

神の正しさを、そして、自らの正しさを。

しかし……。フィルデラにとって正しかった神は、この竜にとっては邪悪な忌むべき存在なのだ。

真に正しきものなどあり得ない。

それは神においても例外ではないのだ。

真実を知った以上、フィルデラには自らをごまかすことは許されない。

もう何も知らなかったところには戻れない。

フィルデラには、神が、そして自分達が、完全な正義であると、もう信じることができなかったのだ。

心は、決まった。

「あなたに力を貸すわ……。なにを私に求めているのか、教えて」

竜が小さくうなづくと、虚空に突然、こぶし大の黒い物体が現れた。

フィルデラは、胸にそれを受け止める。

この子を、お願いします……。

必死になって神から隠していたのであろう。命を削って造りあげた結界の中に、彼女は卵を隠していたのだ。

「必ず……必ず護つてあげる。だから安心して」

そう、問いかけてフィルデラは、彼女の魂には、もう返答を返す力も残っていないことに気が付いた。

「あなたの想い……。必ずこの子に伝えてあげるわ」

あふれ出る涙をぬぐおうともせず、フィルデラは決然として、この残酷な牢獄を後にした。

新月の闇の中、この光の神殿には彼以外に動くものはない。

今日を選んで正解だったな……。

光神殿に仕えるものにとって、今夜は禁忌の夜。何人たりとも出歩くことは許されない。

普段なら、潜入することなどとうてい不可能なここも、この夜だけは何とかなるかもしれない。

そう思って、あせる気持ちを抑えて時を待ったのは、正解だったようだ。

失敗は許されないからな……。

大切な……大切な、存在。

今、こうしてここに自分があるのは彼女のおかげなのだ。

母を失った自分をここまで育ててくれた彼女。

もうこれ以上、自分にとって大切な存在を失うのはごめんだった。

……見つけた

さすがに光神殿の総本山だけあって、その結界の堅固さは並みたいていではなく、これまでは彼女の気配をつかむことさえできなかった。

だが、やっとそれが見つかった。ルークは安堵に小さくため息をついた。

いや……まだ本番はこれからだ。

ルークは緩んだ気を引き締め、広い神殿の中を、気配を消しながら慎重に進んだ。

ここを……左。

術で探るが何もいないようだ。

よし……。

ところが、そこを左折すると、突然目の前に人影が現れたのである。

しまった……待ち伏せか！

恐慌に陥りそうになる自分の心を叱咤し、目の前の人影を見極める。

金色の髪、同じく、金色の瞳。

闇のなかにあっても輝くような美しい少女が、驚きに目をみはってこちらを見ている。

まずい……！

ルアークは、今にも悲鳴をあげそうな彼女の口をすばやくふさぐと、耳元に小さくささやいた。

「叫ぶな……騒ぎになったら、そちらもやばいんじゃないのか？」

今夜は禁忌の夜。

巫女であるらしいこの少女が出歩くことは、絶対許されないはずなのだ。

その予想は当たった。

恐慌に陥りかけたらしい少女は、すぐに冷静さを取り戻し、小さくうなずいたのだ。

「あなたは誰？……ここには、何しに来たのですか？」

たずねる少女の首筋に、ルアークは短剣を突きつける。

「おまえにたずねる権利はない……。こちらの言うことに従ってもらおう」

ルアークが、できるだけ冷たい口調でそう言うが、少女はひるまない。

「もしかして……あなたは、盗賊さん……ですか？」

いちいち盗賊まで“さん”付けで呼ぶところが、この少女の育ちの良さを示しているのだろうか？

「ああ……似たようなものだな」

毒気を抜かれて憚然とした表情で答えたルアークに、少女はにっこりと微笑みかける。

「あの……それでしたらお仕事について、私をここから連れ出してはもらえないでしょうか？ あっ、もちろんその代わりにお仕事を手伝わせていただきます。私、宝物の管理係をしたことがありますから、宝物庫なら御案内できます」

可愛い顔をしてるのに可哀想に……。ちょっと頭が弱いのだろうか？

まあ、せっかく手伝ってくれるって言うのだから、せいぜい利用させてもらおう。

ルークは一抹の不安を感じながらも、うなずいて、少女に肯定の意を示した。

「よかった……ここを出ることに決めたものの、どうやって結界を抜けようか、途方にくれてた所だったんです。盗賊さん……よろしくお願いします」

そう言つて、嬉しそうに微笑む相手に、短剣を突きつけてるのが馬鹿らしくなって、ルークはそれをふところにした。

「こちらです……ついて来てください」

少女は、ルークの肩を引っ張って、宝物庫の方に案内しようとする。

「いや……俺の目的は宝物じゃないんだ……。きみは、このあいだ捕まった黒竜が、どこに捕えられているか知らないか？」

ルークのその質問に、少女は驚いて目を見張った。

このひと……いったい？

いきなり目の前に彼が現れた時は、自分が神殿を抜けだそうとしているのが、ばれたのかと思った。

だがよく見てみれば、現れた青年の髪は黒っぽい茶色、瞳は黒で、光の要素がほとんどなく、神官ではありえない。

次に、盗賊……だと思った。

だがこの青年 いや、よく見れば年は自分とそんなに違わなく、青年と呼ぶには若すぎる、かといって少年と呼ぶには大人びているは、宝物が目的ではないと述べ、さらには、あの、黒竜のことをたずねてきたのだ。

できるだけ感情を表すまいと抑えた表情に、必死の思いがにじみでている。

このひと！ あの黒竜さんを、助けに来たんだわ！

「あなたは……彼女のお知り合いなんですか？」

フィルデラの質問に、青年は思わず声をあげる。

「教えてくれ！ 彼女は……エメラークは無事なのか？ そして、どこに居るんだ……。教えてくれ！」

この青年にとってあの竜は、本当に大切な存在なのだ。

彼の純粋な想いにうたれて、フィルデラは力なくうつむいた。

「あの方は、エメラークさんっておっしゃるんですね……。いま、

彼女は封邪の間という場所にとらわれています」

「そうか……。良かった、無事だったんだ……」

フィルデラの言葉に、青年は安堵の表情を浮かべた。

その嬉しそうな表情が、フィルデラの心をさらに暗くする。

どうすればいいのだろう……。

確かに、まだあの暗黒竜は生きている。だが、彼女を救うことはもう不可能だ。できるものならば、フィルデラが自分でやっている。その事実は、彼を打ちのめすだろう……。

だが、告げなくてはならない。フィルデラは悲痛な表情で、言葉を紡いだ。

「ですけど……彼女を救うのは不可能です。もう、彼女には逃げるのに耐えうる体力も、精神力ありません。肉体も魂も、神によってぼろぼろにされてしまってるんです。あんな……あんなひどいことって……」

思い出すだけで目頭が熱くなる……。あんな状態になっても、彼女は全てをかけて、卵を護ったのだ。

「まさか……。うそだよな……？」

青年の問いに、フィルデラはかぶりを振った。

「そんな……」

青年はがつくりと肩を落とし、力なく床に膝をついた。

握った拳を床に打ちつけ、きつとフィルデラを睨み付ける。

「エメラークがいつたい何をしたって言うんだ！ 邪悪な暗黒竜？ よくもそんなことが言える！ きさまらが彼女の何を知っているというんだ！ 光に満ちていれば何をしてもし正しいというのか？ 闇に属するものはみな、邪悪で、浄化されなければならないのか？ 平和に暮らしていた彼女を狩りたてて捕らえ、いたぶるのが正義の行いなのか？」

彼の怒りは正当だ……。

血を吐くような青年の言葉が、フィルデラの心を切り刻んだ。

「エメラークの所へ案内しろ！ 封邪の間はどこにあるんだ！」

青年がフィルデラの襟首をつかみ、揺さぶりながら問い詰める。

「それはできません！」

ぱしんっ……。

言い返したフィルデラを、青年の平手がおそった。

だが、フィルデラはひるまずにさらに言葉を継ぐ。

「今から封邪の間にいけば、神に知られないわけにはいきません……。これを見てください」

フィルデラは必死の表情でそう言うと、背負い袋をおろし、そのなかにあるもの……闇色の卵……を、青年に示した。

「こ……これは……」

「そうです……この子を護るために、エメラークさんは、すべてをかけたんです……。私はこの子を彼女に託されました。私には、この子を安全に逃がす義務があります。たとえあなたにでも、この子を危険にさらすまねはさせません！」

「そっ……か。そうだったのか……。エメラークも……」

その闇色の卵は、青年の怒気をつすれさせ、冷静な表情をとり戻

させた。

だが、その感情を抑えた表情のなかには、薄っぺらい表面的な怒りではなく、蒼く冷たい光を発しながら、その実、赤い炎の何倍もの熱を持つ紫炎のような、真実の怒りが存在するのをフィルデラは感じていた。

どんな経験が、人にこれだけの怒りをもたらすのだろうか？

このひとに、これだけの怒りを抱かせるほどの仕打ちをしたのは、自分がこれまで信じてきた神なのだ。

私、本当になにも知らなかったんだわ……。

そんな神に盲従してきたこれまでの自分を、フィルデラは心から恥じていた。

「危険をおかしてこいつを護ってくれたのに、殴ったりしてすまなかったな。女に暴力をふるうなんて最低だ……。エメラークに怒られちまう。とにかく、卵は預かるう。きみは巫女なんだろう？ 見つからないうちに、自分の部屋へ戻るといい」

自嘲してつぶやく青年に、フィルデラはかぶりを振る。

「いいえ……あなたの怒りは当然です。私は……私達はそれほど、ひどいことをしてきたんですから。知らなかった、気付かなかったで済まされることではないんです……。神は間違っています！ ですから、私は戻りません。この卵を托された以上、さっきも言ったように、私はこの子にたいして義務があるんです。私もあなたと同じ行します」

そう言ってフィルデラは、青年を真剣な表情で見つめた。

「本気……なのか？ 俺はおまえの信じる神に、敵対する組織に属しているんだぞ？」

念を押す青年に、フィルデラは迷うことなくうなずく。

「はい。あなたは、私が以前信じていた神の敵です」

フィルデラはそう言って、にっこりと微笑む。

しかし、ルアークは、その笑顔の中に固い決意が秘められているのを知った。

「わかった……俺の名前はルアークという。よろしくな」
「私は、フィルデラと申します……よろしく願います……」
運命が……動き始めた。

わからない、娘だな……。

自分よりも真剣に宝物をあさるフィルデラを見て、ルアークは頭を抱えた。

「ルアークさん見てください……。この大きな紅玉を。これなら、高く売れますよね……。ひい、ふう、みい……。七つありますから、ひとつくらい持って行っても、ばれません。どうぞ……」
「あつ、ああ……」

うずらの卵ほどの大きさの紅玉を受け取って、ルアークは力なく返事を返す。

あのあとすぐに脱出しようとしたルアークを、『ついからです』と宝物庫に誘ったのはフィルデラの方なのだ。

しかも、『足がつくような品は困りますよね』などとおっしゃて、手際よく、持ち出す宝物の選別を始めたやんかしたのだ。

こいつこそ、本物の盗賊なんじゃないだろうな？

ルアークは、小さな巾着袋を取り出すと、フィルデラが選別した宝石を、その中に入れた。

「あれ……ルアークさん、もしかしてその袋は？」

「そう、『狭間の袋』さ」

『狭間』と呼ばれる世界の隙間とつながるこの袋は、みかけの何倍もの容量をもっている。ルアークが取り出したその狭間の袋は、人ひとりくらいならなんとか収納できるくらいの容量を持っていた。「もう……そんな便利な物があるなら早くおっしゃってくださいばいいのに……。それがあんなら、持ち運びの利便のために、かさの少ない宝石だけを選ぶ必要はありませんから……。貸してください」

そう言って袋をひつたくと、今度は食器棚の方にむかう。

銀や金、そして玻璃でできた高価そうな食器が、呆れるほどたくさん並んでいる。

フィルデラは、種類の食器について数枚づつ、狭間の袋の中にしまいこんでいった。

「これぐらいでよろしいでしょうか？ ルアークさん……」

よろしいでしょうか何も、一生、いや、十生は遊んで暮らせそうほどの宝物が、すでに袋の中にはしまいこまれている。

「いいんじゃないかい……。しかし、おまえ、宝物庫の管理係をしてたって言ってたが、本当は宝物の横流しでもしてたんじゃないだろうな？」

ルアークがそう言うと、フィルデラは首を振った。

「いいえ……業務の一環として、宝物の売却を行っていたんです。私も、最初は知らなかったんですけど、ある時、宝物の一部が減っていることに気がついて、テレシアさん えっと、管理長をなさっている女神官です にたずねたら、極秘のうちに必要な資金をそろえるために、裏のルートで売却する必要があったんだって教えられて……。それから私も、テレシアさんのお仕事を手伝うようになっただんです」

あの日、それを横流しって言うんじゃないのでしょうか？

どう考えても、テレシアという人物に騙されていたとは思えない。

しかし、あくまで真剣らしいフィルデラに、そのことを指摘するのは可哀想で、ルアークは頭を抱えながらも黙っていた。

本当に、おかしい娘だ……。

巫女らしく、純真な性格をしているのだが、その割には視野の狭さが無い。

世間知らずかと思えば、裏のルートでの取り引きなんていう、なんでもない知識を身につけていたりするし……。

なによりも、選ばれた者だという特権意識がないのだ。

これまでに出会った、貴族や神殿の特権階級達は、必ずその特権意識が腐臭を漂わせていた。

巫女などの中には、下層階級に優しく接する者もあったが。それはあくまで、その特権意識に根差した、偽善的なお情けでしかなかった。

そして、ほとんどの者は、その偽善的なお情けでさえ、持ち合わせていないのだ。

それに比べて、この少女はどうだろう？

特権意識に凝り固まることなく、物事を客観的に判断する、たぐいまれな能力を持っているのではないだろうか？

間違っていると思えば、今まで信じていた神をも批判し、横流し以外の何物でもない行為を、業務だと説明されてあっさり納得し、盗賊だと思った相手に、自分の身柄をまかせようとし……いや……やっぱりただのアホかも知れない……。

「ルアークさん、どうされました？　なんだか、おかげんがよろしくないようですけど……」

心底、心配そうな表情で自分を見るフィルデラに、ルアークの疲労は倍化した。

「いや……なんでもない……。とにかく、ここを脱出しよう……」

「はい」

出会ったばかりの自分を、信じきった瞳で見つめながら返答するフィルデラに、ルアークは深々とため息をついた。幕間

「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が関ってたんだ

……」

神殿の一角、宝物庫からそう遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。

幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルアークだ。

「ルアークくんは、私やこの娘みたいなの、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があったんだ。“かけら”を送り込む以外に、

こんな手段が……」

独り言を言うのがくせなのだろうか？ 幻像を眺めながらぶつぶつ言う彼女は、ちよつと危なくみえる……。

「やっぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルアーくんは私達と違って、この世界で産まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立っているんだわ」

今回の件に、妹 いや弟というべきか？ のレアディが関わっていたことは知っていた。

これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行ったものを除けば、それはすべて、レアディの波長を伴っていたからだ。

その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかった。そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。

「さあてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘ったら、私が目をつけてた宝石、全部持ってっちゃって……」

テレシアと呼ばれるその女性は、そう言うてにっこりと微笑んだ。

～幕間～

「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が関ってたんだ……」

神殿の一角、宝物庫からそう遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。

幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルークだ。

「ルークくんは、私やこの娘みたいな、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があつたんだ。“かけら”を送り込む以外に、こんな手段が……」

独り言を言うのがくせなのだろうか？ 幻像を眺めながらぶつぶつ言う彼女は、ちよつと危なくみえる……。

「やつぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルークくんは私達と違って、この世界で生まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立っているんだわ」

今回の件に、妹 いや弟というべきか？ のレアデイが関わっていたことは知っていた。

これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行ったものを除けば、それはすべて、レアデイの波長を伴っていたからだ。

その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかった。そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。

「さあてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘ったら、私が目をつけてた宝石、全部持ってたやつて……」

テレシアと呼ばれるその女性は、そう言うてにつこりと微笑んだ。

二章

「早く……出たいなあ……」

暗くて、寒くて……。広いんだが狭いんだが良くわからない、その妖しげな空間の中で、フィルデラは心細げにつぶやいた。

ここに入ってから、もう何時間もたったような気がする一方、ほんの数分間しかたつてないような気もする。

時間の感覚がおかしくなってる。

もしかしたら、この空間では外とは時のたち方が違うのだろうか？
外での数分が、ここでは何十年にもなったりして……。

冗談でそう思ったのだが、その考えはフィルデラの心をさらにおびえさせた。

結界を安全に越えるために、狭間の袋に入ってもらえないか？

そうルアークに言われて、入ってみたのはいいが……。

「いやだ、もう……早く出たい！」

そう叫んだ瞬間、突然、胸と背中中に手が押しあてられた。

「きやう！」

ぐい……。

その手は無造作にフィルデラの身体をつかみ、“外”へと釣り上げる。

“外”に出たフィルデラは、突然、地面の角度が変わったせいで倒れそうになり、広い胸に抱きとめられた。

少年　この時のルアークの表情は子供っぽくて、少年と呼ぶにふさわしいものだった　は、フィルデラをしっかりと抱きとめながらも、偶然の起こした事態に思わず照れてうつむいた。

しかし、まだ両手は、フィルデラの身体　その胸と背中にしっかりと添えられている。

ルアークに触れている部分が、炎にあぶられるように熱い。
「ルアークさん……。手を、手を離してください……」

フィルデラの言葉に、半ば放心状態におちいつていたルアークは、やっと自分を取り戻し、あわててフィルデラの身体を離れた。

「ご……ごめん」

「いいえ……」

フィルデラの胸は早鐘をうち、全身が火が出るように熱い。

それは、これまでウワサにしか聞いたことのなかった、恋の症状に酷似していて……。

まだ、出会ったばかりなのに……。

そう考えれば、今度は“一目惚れ”、という単語が頭に浮かんで来る。

ルアークはルアークで、何を思っているのか、真っ赤になってうつむいたきり、ひと言も話さないし……。

ふたりを気まずい沈黙がおそった。

テレシアが見ていれば、『もう……ふたりとも、可愛いんだから』っと思いつき喜びそうな雰囲気である。

だが、当事者たる初心なふたりにとっては、冗談ではない。

互いに“異性”を意識してしまって、彼らとしては、照れてうつむくしか対処の方法がなかった。

とにかく！ 今はこんな恋愛ごっこをしているヒマはないのだ。

何とか心を落ち着かせて、話し掛けようとするが……。

「あの……」

「えーと……」

言葉をかけようとするタイミングさえばつちり合ってしまった、また、ふたりとも照れてうつむいてしまった。

そうやって『ふたりの世界』にひたっていた彼らを、現実引き戻したのは獣の気配だった。

ルアークの顔がぱつと引き締まり、冷静な、大人びた表情に変化する。

そして、すばやい動きでフィルデラを後ろにかばうと、殺気を発する獣に対した。

「光獣だな。行きには見掛けなかったから油断していたが、やはりこいつらには禁忌は関係なかったか……」

光獣とは、種を問わず、光の要素を多く持った獣のことを指す。そして、巫女である自分達と同じく、神に選ばれた聖なる存在であると、フィルデラは教えられてきた。

しかし、フィルデラにも解るその気配は、歪み、狂気さえはらんだ禍々しいものであった。

ひい、ふう、みい。

三つの気配がふたりを伺っている。

それらは、うなり声も、吠え声もたてない。

この獣達には、侵入者を始末するために特殊な訓練がなされているのだ。

フィルデラをかばうルアークには、隙が無い。

獣達も、攻めあぐねているのか、まだおそつてはこない。

緊張が臨界点に達した瞬間。ルアークがふつと気をぬいた。

引き絞られた矢が放たれるように、光獣がルアークに向かう。

「ルアークさん！」

その“三本の光の矢”に、ルアークが貫かれたような錯覚を感じて、フィルデラは思わず声をあげた。

だが、倒れたのはルアークではなく、三頭の光獣達だった。

勝負は一瞬。

一頭は短剣で眉間を突かれ、もう一頭は同じく短剣でのどをかき切られ、そして、ルアークに達するかに見えた最後の一頭は、彼が造り出した魔法の障壁に跳ね返されて、地面に転がっている。

にやり……。

さつきフィルデラの前で、照れてうつむいていたの同一人物とは思えない、凄惨な笑みを浮かべ、ルアークはまだ息のある最後の一頭に歩み寄る。

くうくん。

その光獣……どうやら犬だったようだ……は、もうすでに戦意を

失い、哀れな鳴き声をたてている。

「やめて！」

殺しては……だめ！

しかし、その獣をかばおうと飛び出したフィルデラは、ルアークに力一杯突き飛ばされた。

「きやうっ」

したたかに腰を打ち付け、フィルデラは思わず悲鳴をあげる。

「ルアークさん……あなたは！」

突然、理解できない行動をとった相手を非難しようとしたフィルデラは、実は間違っていたのは自分であったことに気がついた。

光獣は戦意を失ってなどいなかったのだ。

ルアークに突き飛ばされなければ、フィルデラは光獣に引き裂かれ、命を失っていただろう。

「芝居をうつとは、獣の分際で味なまねをしてくれる……」

そうひとりごち、ルアークは、倒れたフィルデラをかばうように、光獣と対峙した。

重苦しい沈黙。

やがてそれにじれた光獣が、ルアークに飛び掛かった。

だが、対するルアークには先程のような、技の切れが無い。

くり出した短剣は、やすやすと獣にかわされてしまい、辛うじて間に合った魔法の障壁で、獣の攻撃を防ぐ。

「くっ……」

その様子を見て取って、獣はここぞとばかりに、ルアークに連続攻撃をしかける。

反撃もできずに防御に徹したルアークが、少しずつ追い詰められていく。

ルアークさん！ どうしたの？

「あっ……」

フィルデラは気付いた。ルアークは傷を負っているのだ。

肩口からななめにえぐられた、深い傷。

その傷のために、ルアークは本来の力を発することができないのだ。

あの時……自分をかばって突き飛ばした時。

彼は自分の代わりに傷を負ったのだ。

フィルデラは自らの愚かさを悔いた。

そして、ルアークを傷つけ、追い詰めている獣に対して、これまで感じたことのない、怒りに似た、昏い感情を抱いた。

これは……なに？

それは、憎しみ。

そう呼ばれる感情であることを、フィルデラは知らなかった。

「うつ……」

獣の鋭い攻撃を腕に受け、ルアークが短剣を取り落とした。

武器を失ったルアークに止めを刺さんと、獣が跳躍する。

「だめええっ！」

その極限の状況に、フィルデラの中で感情が暴走し、『力』となつてほとばしった。

ここで、死ぬのか？

間近に獣の姿をした死が、迫っている。

『力』さえまともに使えれば……。

結界は抜けたといつても、ここはまだ光神殿の敷地内である。

闇の恩寵深いルアークの『力』は、ほとんど封じられてしまっている。

だが、ただ死ぬわけにはいかない。

自分が死ねば、次はあの少女が、この獣に引き裂かれるだろう。

せめて……相討ちに……。

使えるかぎりの『力』を集めて、闇の刃を造りあげる。

ふふっ……。

今、意識のほとんどを占めるのは、エメラークでも、母でもなく、出会ったばかりのあの少女だった。

惹かれて……いる？

自分とは対称的な存在。

光の恩寵深い、美しい少女に。

自分は、惹かれているのだ。

もっと知りたかった。

彼女のことを……。

だが、その願いがかなえられることはない。

もう終わりなのだ……。

全てをあきらめた瞬間。

まばゆい白光が、獣を襲った。

圧倒的な光の力。

しかし、自らとは相反するはずのその力に、ルアークは不思議な暖かさを感じた。

「ルアークさん！」

ほとばしった『力』が『光』と化し、いままさに、ルアークを引き裂かんとしていた光獣に注がれた。

その光は、破壊のためのもの。

光獣が溶けていく。

どろどろと歪みながら、光獣が溶けていった。

どさり……。

醜く歪んだ光獣の死体が、地に横たわる。

「私……わたし……？」

自分が殺したのだ。

「あつ……ああ……」

自分自身が怖かった。

あの時、確かにフィルデラは光獣の死を願った。

昏い、これまで感じたことの無いような感情に突き動かされて、『力』を破壊の光に変え、光獣を殺したのだ。

フィルデラは呆然と、その場にへたりこんだ。

「フィルデラ……危ない所を済まなかった……。おかげで助かったよ」

ルアークに声をかけられても、フィルデラは返事を返すことができなかった。

普通ではないフィルデラの様子に、ルアークは驚いて駆け寄る。

「フィルデラ！　しっかりしろ」

ぱしっ……。

軽くほほを叩くと、やっと瞳の焦点があつ。

「ルアークさん。私は……わたしは……」

その瞳に浮かぶのは罪の意識。

彼女は、自分自身におびえているのだ。

「フィルデラ……何におびえている？」

ルアークは、わざと、突き放すようにそう言った。

「私は……なぜ、あんなことを……。私は……」

うわごとのようにつぶやくフィルデラを、ルアークは皮肉げに嘲ける。

「なるほど……俺を助けたことを後悔してるってわけだ……」

「違います！　どうして、そんな！」

「そうじゃないか。おまえが“あんなこと”をしなければ俺はあの獣に殺されていたんだぞ。光獣を殺すか、俺を見殺しにするか、あの場面では二者択一だ。そして今、おまえは光獣を殺したことを後悔している。ということは、俺を助けたことを後悔していると、そう言うことになるんじゃないか？」

「それは……」

詭弁だ。そう言い返そうとしてフィルデラはできなかった。

ルアークの言葉は、ある意味においては正しかったからだ。

だが、やはりそれは詭弁だ。

生き物を殺すのは絶対に許されないことだ。

たとえそれ以外に方法がなかったとしても、そのことを正当化してはならない。

それは、絶対に正しいことだ。

フィルデラは、その、絶対に正しいはずの自分の感情を、曲解されたことに怒りさえ覚えて、ルアークに反論しようとする。

この時、フィルデラに少しでも冷静さがあれば、ルアークのその冷たい言葉の裏に、フィルデラの心が危険な自己嫌悪の罠にはまるのを防ごうという意図があったことに気付いただろう。

だが、そのようなルアークの配慮を必要とするほどの今の彼女の心に、そんな余裕があるはずもなく、怒りに流され言葉を紡いだ。

「それは違います！ たとえそれしか方法がなかったとしても、命を奪うのは絶対に許されないことです。あなたのように、そのことを当然だなんて思うのは間違っています！ 光獣を屠ろうとした時、あなたがどんな表情をしていたかご存知ですか？ まるで命を奪うことを楽しんでいるかのような、そんな表情でした……あなたは……」

それ以上、フィルデラは言葉を続けることができなかった。

冷たい……つめたい……感情をなくしたルアークの発する冷気に、さえぎられたのだ。

「そう……か。俺は、そんな表情をしていたか……。おまえは、そう感じたのか」

おまえも……おなじか……。

自嘲の笑みを浮かべたルアークの、その苦々しいつばやきに、感情に流されていたフィルデラは、急速に冷静さを取り戻しつつあった。

怒りから立ち返ったフィルデラに、乾いた笑いを浮かべて、ルアークが質問する。

「フィルデラ。おまえは食事をしたことがあるか？」

唐突なルアークの質問に、フィルデラは戸惑いの表情を浮かべて、口を開いた。

「それは……食事をしなければ、生きていけませんから」

フィルデラの返答に、ルアークは馬鹿にしたような表情を作って、言葉を継ぐ。

「それは大変だな。おまえは毎日食事をするたびに、殺された動植物のために、今のよう後悔しているのだろうか。なにしろ、自ら手を下してさえ、これだけ自分を責めているんだ。自らは手を汚さず、罪を他人に委ねている食事のときの悔恨は、想像を絶するものなんだろうな」

「あ……」

単純な、本当に単純な事実。

自分が今、ここにこうして生きているということが、他者の犠牲のうえにあるという事実。

そのことに、フィルデラはまったく気付いていなかった。

ルアークを助けるために、あの光獣の命を奪ったこと。

そして、自らが生き続けるための糧として、動植物の命を奪うこと。

この両者にどんな違いがあるのだろうか？

いや、ルアークの言うとおり、自ら手を下していないぶん、食事をとるときの罪のほうが重いくらいだ。

自分も、あの、神とおなじだ……

絶対的に正しいことなどありえない。ただひとつ、それ自身をのぞいて。

それなのに自分は、自分の中だけでしか通用しない『正しさ』を振りかざし、ルアークを傷つけたのだ。

「ルアークさん……」

呼び掛ける……が、何の反応もない。

フィルデラを完全に無視して、ルアークは倒した光獣の方に向かおうとする。

「うつ……」

肩の傷がいたむのか、一瞬顔をしかめたルアークに、フィルデラは思わず縋りつく。

「ルアークさん！」

拒絶される……と思った、せめてそうして欲しかった。

だがルアークは、何の感情も表情に宿さず、フィルデラに顔を向けさえしなかった。

フィルデラは、くじけそうになる心を叱咤して魔法を発動し、彼の傷を癒す。

しかしルアークは、何事もなかったかのようにフィルデラを無視し、静かに立ち上がった。

そして、取り落とした短剣を拾い、傍らに転がっている、フィルデラの発した光線に灼かれて醜く歪んだ光獣の死体を、短剣で突いた。

「いったい何を！」

後を追いかけてフィルデラは、その行為の理由を知った。

その獣は、まだ死に切れずに苦しんでいたのだ。

……ありがとう……。

ルアークに感謝を捧げ、魂が去っていく。

その魂に奇妙な歪みを感じて、フィルデラは思わず問いかけていた。

「この歪みは……なに？」

去りかけていた魂が、フィルデラに思念を返す。

大きな、おおきな光に満ちた存在。

光獣の、その存在に対する凄まじい怒りの波動が、フィルデラをおそう。

それが……それが、あなたを歪めたの？

肯定……予想どおりの肯定。

そして光獣は、フィルデラにも感謝の念を返した。

それを言葉に直せば以下のように訳することができる。

あなたの光は暖かった……開放してくれてありがとう……と。
自らを傷つけたフィルデラに対して、感謝の念を返したのだ。
消えゆく魂を見送るフィルデラの中に、神に対する新たな怒りが
わきあがる。

こんな……こんなことって！

破壊の光を暖かく感じるほどの苦しみ。

それはいったい、どのようなものなのだろう？

怒りは臨界点を越え、昏い何かを伴って、ある感情へと進化した。

これは……この感情は……。

それは、さつき光獣に対して抱いた、負の感情と同じものだった。

それは、憎しみ。

いまフィルデラは、初めてその感情の意味を理解した。

神が憎かった。

このようなむごい行いを見せ付けられて、そう思わずにはいられ
なかった。

フィルデラは気付いた。

あの時、ルアークの凄惨な表情の裏に、存在していた感情に。

ルアークさんも……憎んだんだわ。

いえ……ずっと、憎み続けて来たんだわ……。

これは負の感情。

昏い感情。

だが、これは人としてあるために、必要なものだ。

否定することはできない。

そのことにいま、フィルデラは気付いた。

「ルアークさん……」

呼び掛ける……が、荷物をまとめるルアークに反応はない。

しかし、フィルデラは構わず、言葉を続けた。

「ルアークさん、すいませんでした。私……浅薄でした。あなたに、
軽蔑されても仕方ないと思います。ですけど……あなたと同様に、
私も神を許すことができません。そして、そんな神に仕えていた、

自分自身を許すことができないんです。ルークさん、お願いです。私にその罪をつぐなう機会を与えてください。そして、今、重ねたばかりの、あなたに対する罪に対しても……。お願いします」

反応は期待していなかった。

だが、ルークは振り向いた。

相変わらず無表情だが、とにかく振り向いてはくれたのだ。

「こいつを托されたのはおまえだろう？ それなら、最後まで責任はもて」

ぶつきらばうにそう言つて、竜の卵の入った背負い袋を、ルークはフィルデラに返した。

それつきり、何も言わず無言で歩き去っていく。

フィルデラは静かに、その後を追いかけて行った。

既に峠を越え、東の海が見える所まで進んでいる。

水平線が、白み始めていた。

まもなく、朝が訪れる。

ルークは、ちらりと、横目で後ろを振り返った。

一晩中歩き続けているのだ。

疲れているだろうに……。彼女は何の不平も言わない。

どうして、おまえは……。

いや……。どうして……。俺は……。

裏切られた……。と思った。

だが、裏切ったのは、自分の方だったのだ。

彼女は確かにルークを傷つけた。

彼女に惹かれはじめていたルークは、彼女を理想化し、無邪気に、彼女が自分の全てを受け止めてくれるものと信じていた。

その、勝手な理想を崩されて、ルークは傷ついた。

命を奪うことを楽しんでいるような表情をしていた……。と。

彼女はそう言った。

あの時、ルアークのほとんどを占めていたのは、神への怒りだった。

しかし、自分の中に、少し、ほんの少しだが、殺戮を楽しむ感情があったことに、ルアークは気付かされた。

そして、そのことをごまかすために、自分はさも正しいかのよう
に、彼女のちょっとした間違いを責めたてたのだ。

過剰防衛……だ。

自分の言葉がどれだけの打撃を彼女に与えたか。

ルアークは気付いていた。彼女の心があげた悲鳴に。

だが、あの時の自分は、彼女の心が傷つくことに、喜びを感じて
さえいたのだ。

それなのに彼女は、そんなルアークの苦し紛れの皮肉を真剣に受
け止め、ひたすら自分だけを責め続けている。

俺は卑怯だ……。

そうやって、彼女が苦しんでいるのに気付いていても、自分の過
ちに気付いていても、ルアークは何も知らないふりをした。

彼女の苦しみに関心しながら、ルアークは何もしなかったのだ。

そのとき、どさり……と、後ろで音がした。

振り向くと。

体力の限界に達したフィルデラが、地に横たわっていた。

卑怯なだけではない……。

本当に自分は情けない……なんと情けない男なのだろう……。

彼女が、疲れているのを知りながら、気付きながら。

歩みを緩めることもなく、フィルデラにとっては、明らかなオー
バーペースで歩き続けたのだ。

「ごめんなさい……ルアークさん、ごめんなさい」

朦朧とした意識の中でひたすら謝る少女に、ルアークは水筒を差
し出した。

「飲め……」

のどに水を流し込み、一息ついて、フィルデラは悲しげにうつむいた。

「すいません……。ルアークさんにご迷惑をおかけして……。足手まといになってしまつて……」

「そう自覚があるのなら、せめて倒れる前に言つて欲しかったな。無理をしても、結局こういうことになつて、余計に足を引つ張ることになる」

おまえは何も悪くない……。悪いのは俺だ……。

そう思う心とは裏腹に、口をついて出たのは冷たい言葉だった。紡がれた言葉は刃となつて、彼女の心に突き刺さる。

「ごめんなさい……。本当に……。ごめんなさい」

なにを、謝る必要があるというのだろうか？

悪いのは自分だ。

彼女にとつて峠越えがきついことは、最初から解りきつていたのだ。

だから、荷物の分担とペース配分に気を付けてやれば、何の問題もなかったはずだ。

それを解つていて、ルアークはわざと彼女を無視したのだ。

本当に……。どうしようもないな……。俺は。

自嘲してルアークは言葉を紡いだ。

「まあ、済んでしまったことは仕方ない……。次から気をつけられればいい。どうせ、そろそろ休憩を取らねばならなかったんだ。食事にしよう……。立てるか？」

なにを、かつこつけているんだ？

いかにも傷ついた彼女を許してやるという風を装つて、ルアークはフィルデラに手を差し出した。

そんな自分を、ルアークはさらに嫌悪した。

自分に向けられた彼女の笑みが、心に突き刺さった。

完全に嫌われてしまった……と思っていた。
目の前に差し出された腕が信じられない。

彼は、優しい表情で自分を見ている。

フィルデラは、ゆっくりとその腕を取った。

力強い腕に引かれて立ち上がってみると、まだ足がぐらつく。

だがルアークが、しっかりと支えてくれた。

「ルアークさん……」

それだけで、たったそれだけで、傷ついた心が癒されていくのを、
フィルデラは感じていた。

岩場の陰、平らになった大きな岩の上に、ふたりは腰をおろした。
ルアークは自分の背負い袋をおろすと、塩漬け干肉と、乾麦、そ
して干果を取り出した。

「火は使えないから、このままで我慢して欲しい。食欲がないかも
しれないが、食べなければさらに体力を失うことになる。口にあう
とは思えないが我慢して食べるんだ」

フィルデラはうなずいて、沢水で洗って塩を抜いた干肉を受け取
り、口に入れた。

塩辛い……が、疲れたフィルデラにはその辛さが心地好かった。
だが、固い肉をよく噛んで、飲み込もうとしたとき……。

「うっ……」

胸がねじれるような吐き気が、フィルデラを襲った。

「はあ……はあ……うえっ……」
げぼ……

吐くものなどないというのに……。

自らを責めるように、フィルデラは苦い液体を絞り出し続けた。

「フィルデラ……」

これは肉体的なものではない、精神的なものだ。

フィルデラの“こころ”がふるえている。

ルアークは、昨夜自分がフィルデラに放った言葉を思い出していた。

あの言葉はフィルデラに、生きるためには必ず罪が伴うことを、気付かせてしまったのだ。

そして、繊細なフィルデラの心は、他者を犠牲にしてまで、生き続けることを望まなかったのだろう。

俺の……せいだ……。

俺が、あんなことさえ言わなければ。

彼女は、自らの罪に気付くことなく……。

いや……それではだめだ

彼女は気付かねばならなかった。

『生きていくこと』がはらむ罪に、気付かなければならなかったのだ。

ルアークは思い出した。

エメラークに拾われて、はじめて狩りをした時のことを。

はじめて、他者の命を奪った時のことを。

あの時自分は、自ら手を下し命を絶ったウサギの肉を口にして、今のフィルデラのように嘔吐した。

あの時のエメラークの怒りは忘れることができない。

逃げるな……と、彼女は言った。

罪から逃げるな……と。

それに立ち向かえ……と。

フィルデラも乗り越えなければならないのだ。

生とともにある罪を、乗り越えなければならないのだ。

「落ち着いたか？」

ルアークは、できるだけ冷たい口調を装って、フィルデラに話しかけた。

その冷たさを感じ取り、フィルデラはまっぴげを伏せる。

「ルアークさん……私、わたし……」

ルアークは、口ごもったフィルデラをさらに突き放し、皮肉の刃をあびせる。

「いい気なものだな。逃げればそれで許されるところでも思っているのか？ 考えてみる。すべての生命は、生きるために罪を負う。だがそれでも、生きてゆかねばならないんだ。自分の罪から目をそらすな！ おまえは気付いていないのか？ 逃げるからこそ、最大の罪だということに。おまえは卑怯者だ。生をうけこの世に存在する以上、おまえには生き抜く義務がある。ここでそれを放棄するのなら、これまでおまえが生きたために命を絶たれたものたちに、どう言い訳するつもりだ？ もう一度言う。おまえは卑怯者だ！ おまえの罪の償いとは、逃げることなのか？」

そう言つてルアークは、うつむいたフィルデラに水筒を差し出し、口をすすがせる。

そしてもう一度、干肉を切り分けると、フィルデラに押し付けた。「食べるんだ」

フィルデラは、決然とした表情でルアークを見返し、干肉を口に押し込んだ。

固い肉をゆつくりと咀嚼し、心を決めて飲み込む。

「うつ……」

「ごくん……」。

吐き気をこらえながらも、フィルデラは肉を飲み込むことに成功した。

これで……いい。フィルデラは新たな一步を踏み出すことができたのだ。

結果的に、あくまで結果的にはあるが、ルアークのとった態度は正しかった。

自己の存在基盤を失った彼女には、中途半端な優しさではなく、厳しく接することが必要だったのだ。

彼女自身が、新たな土台を、自らの心に造り上げる必要があった

のだ。

「もう、大丈夫だな？」

そうたずねると、フィルデラはこくと小さくうなずく。

「はい……私、自分がどれだけの罪を背負っているか、そのことに全く気付いてなかったんですね。もう逃げたりはしません。自らの罪に、そして、神の罪に、立ち向かって行きたいと思います」

そう言ってフィルデラは、澄んだ瞳に絶対的な信頼を浮かべて、ルアークを見つめた。

誤解だ……。

フィルデラは、ルアークが彼女のために厳しい態度を取ったのだと誤解しているのだ。

そうではない、違うのだ。

結果的に彼女のためになったとはいえ、ルアークは彼女を思いやっ
つて、そんな態度をとったのではない。

彼女の心の清澄さに、自分の心の汚さを認識させられて、それを
ごまかすために、あのような態度をとったのだ。

決して自分は、彼女にこのような視線を受けるにふさわしい人間
では、あり得ないのだ。

しかし……。

そう、解っていながらも、ルアークはフィルデラを、そして自ら
を偽らずにはいられなかった。

怖かった。

彼女に自分のちっぽけな本性を悟られるのが、本当に怖かったの
だ。

だから、ルアークは演技した。

いかにも、すべて解っていたというような笑みを浮かべて、彼女
に微笑みかける自分が、心底から情けなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8505z/>

光と闇のはざまに

2011年12月27日22時50分発行